

岡本韋庵『支那遊記』翻刻・訳註（その一）

有馬 卓也
真銅 正宏

岡本韋庵（名は監輔）は、一八三九年（天保一〇年）に阿波藩美馬郡三谷村に生まれ、一九〇四年（明治三十七年）、六六歳の生涯を閉じた人物である。岡本がサハリン探検や樺太経営に尽力したが、樺太問題を巡って黒田清隆らと意見が対立したことなどは周知の事実である。しかし同時に儒学者でもあり、亦た教育者でもあったことは意外に知られていない。彼の著書はあらゆる分野にわたって数百点にのぼるにもかかわらず、彼の死後に翻刻・復刻されたものは『岡本氏自伝』（昭和三十九年、徳島県教育委員会出版）に収められた、彼の自伝と『窮北日誌』のみであることは実に惜しむべきことと言わざるを得ない。

さて本研究は、徳島県立図書館所蔵の『支那遊記』の翻刻・訳註である。本来ならば、この解題の部分に於て、年代の特定や出入国の時期などをあらかじめ明示すべきなのであるが、岡本の渡中が生涯数度にわたることや、彼の渡中紀行文そのものが未だ十分に整理されていないことから、いずれも確定し難いのが現状である。したがって、本訳註はひとまず資料の翻刻に

つとめ、資料への細かな言及は稿を改めて論じることとする。

この『支那遊記』は、当時の中国の風俗習慣の記述に加えて、岡本の地理学者としての目が最大に活かされた克明な風景描写が特筆すべき点であり、生き生きとその道中が描かれた一級の旅行記である。また本紀行では、岡本は孔子の故郷曲阜から古都洛陽へと至るルートをたどっており、その点に於ても興味深いものがある。

本研究は、当初、有馬（中国文学）と真銅（国文学）の二人で始めた読書会であつたものに本学院生の斎藤綾子（国文学）を加えて読み進めてきた成果である。

【凡例】

一、該本の書誌は以下の通り。徳島県立図書館蔵 整理番号2-4 / 5（岡本韋庵先生蔵書及原稿目録）。〔明治初期〕写。残欠。仮綴一冊（但し同図書館に於て整理の折、保護の為に付したと推されるB5版洋紙反故の袋綴様の仮表紙あり）。縦二四・二二厘、横一六・四厘。料紙、楮紙。墨付、三八丁。每半葉一三行（一）

一九丁、八行（二〇―三八丁）。全文漢文体も、一―一九丁には返り点を付し、二〇―三八丁には返り点なし。全冊にわたり朱筆による見消ち、補入等の校訂が加えられている。また一部に更に墨筆の校訂が加えられている。

一、翻刻作業に於ては朱筆による校訂が行われる以前と以後の双方をとともに考証したが、朱筆も岡本の手になると推定され、朱筆による校訂後が岡本の決定稿と判断される。加えて紙数の制限も考慮し、本稿では朱筆による校訂後の本文のみ掲載することにした。（尚、朱筆校訂が加えられる以前の墨筆原文については、稿を改めて一括掲載する）

一、旧字・俗字で書してあるものは新字に直して記した。

一、明らかに誤字である場合は訂正して注記した。

一、判読不可能な文字は「■」を用いて表した。

一、一―一九丁についてはできる限り底本の訓点に従ったが、明らかに訓点に誤りがある場合は訂正して書き下した。

一、朱筆の「イ」は見消ちを付した字をいかすことを意味し、「ヒ」は同一字疊用記号と推定した。

一、註は最小限にとどめた。

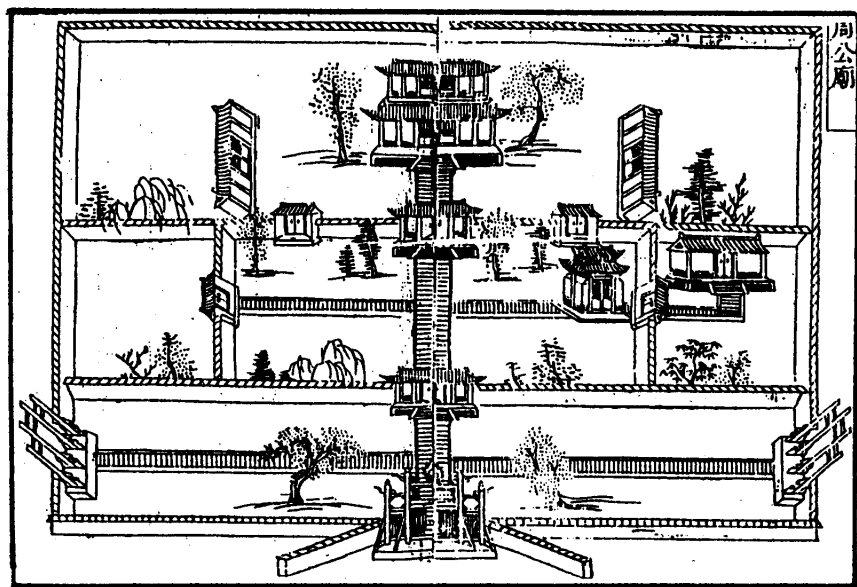
一、担当者名を註の終りに記した。

【訳註】

一〇月二七日

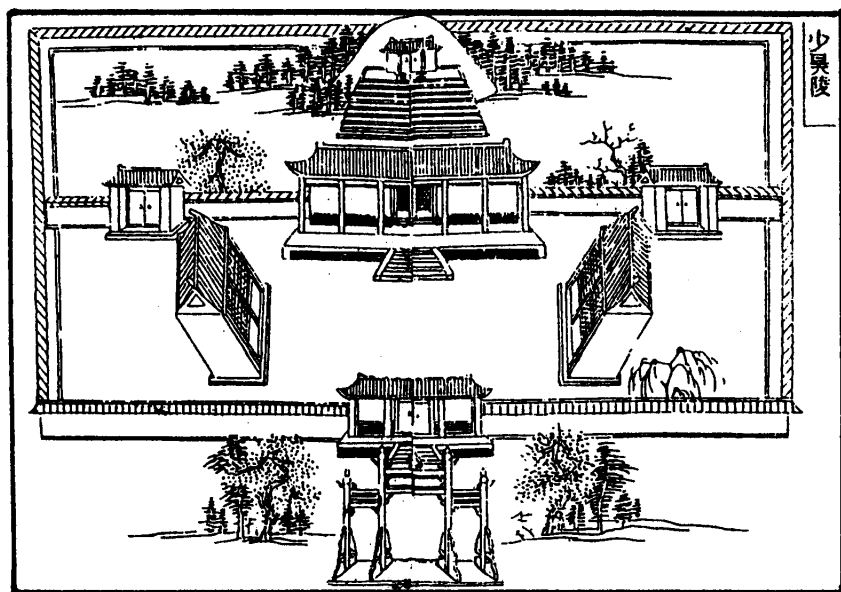
二十七日。周公廟・軒轅壽陵等を見んと欲して、孔廟親徳門に沿って南行し、又た東して正門前に出づ。正門は南面して南城門に接す。四石柱を建て三門を構ゆ。中央の稍や大きな柱の上

に人形を立て、側に下馬の碑あり。門内は老柏森鬱として、其の間に層門を列す。廟の東に木門あり。亦た三門を開く。左転右折すれば五馬祠街に抵る。孔慶鏜を訪ぬるに家に在らず。擯者に告げて「弁名」二卷・「脩静庵遺稿」一卷を衍聖公に贈るを托す。馬を駆けて東城門より出づ。門外に人家、東西に連なり延ぶ。五六町にして左転して東北の隅に到る。周公廟を望む。老柏深秀たり。廟域は南北約二町、東西一町なるべし。南面に三門を開く。上に獸形を注し、題して「元聖門」と曰ふ。廟に近づくに石橋あり。門に題して「櫺聖門」と曰ふ。左右に壁を設け、廟壁に接す。一斜は東南、一斜は西南たり。長さ各おの十余間、高さは一丈なるべし。皆に煉瓦もて築かる。門内には更に石門あり。亦た閉づ。三門は元聖門に異ならず。更に進むこと数百歩にして成徳門あり。木を用て造らる。之が上に樓あり。長さ五六間、高さ四五間。左右に層壁あり。塗るに丹を以てし、中央に各おの小門あり。小門より出づれば各おの一字あり。高さ四五間、長さ六七間。東房に乾隆帝親筆の碑あり。西房には碑なし。意ふに憩処ならん。小門の内は広袤各おの数十間。柏樹蓊鬱たり。石碑、其の間に散点せり。正面に達孝門あり。制、成徳門の如し。内門は長広数十歩。老柏・墓碣多し。左右各おの廟あり。正面は即ち周公廟なり。高さ八九間、長さ十余間。大柱十八本を建つ。龍柱なし。中に公像を安す。王者の冠を戴す。瓔珞、面に垂れ、鬚髪白く、面淡紅なり。我邦の面せし所の武内宿称の如し。上に扁額を懸し、題して「明德勤施」と曰ふ。前に方板ありて、題して「元聖文憲王周公神位」



周公廟

周公廟（『曲阜縣志』卷四）

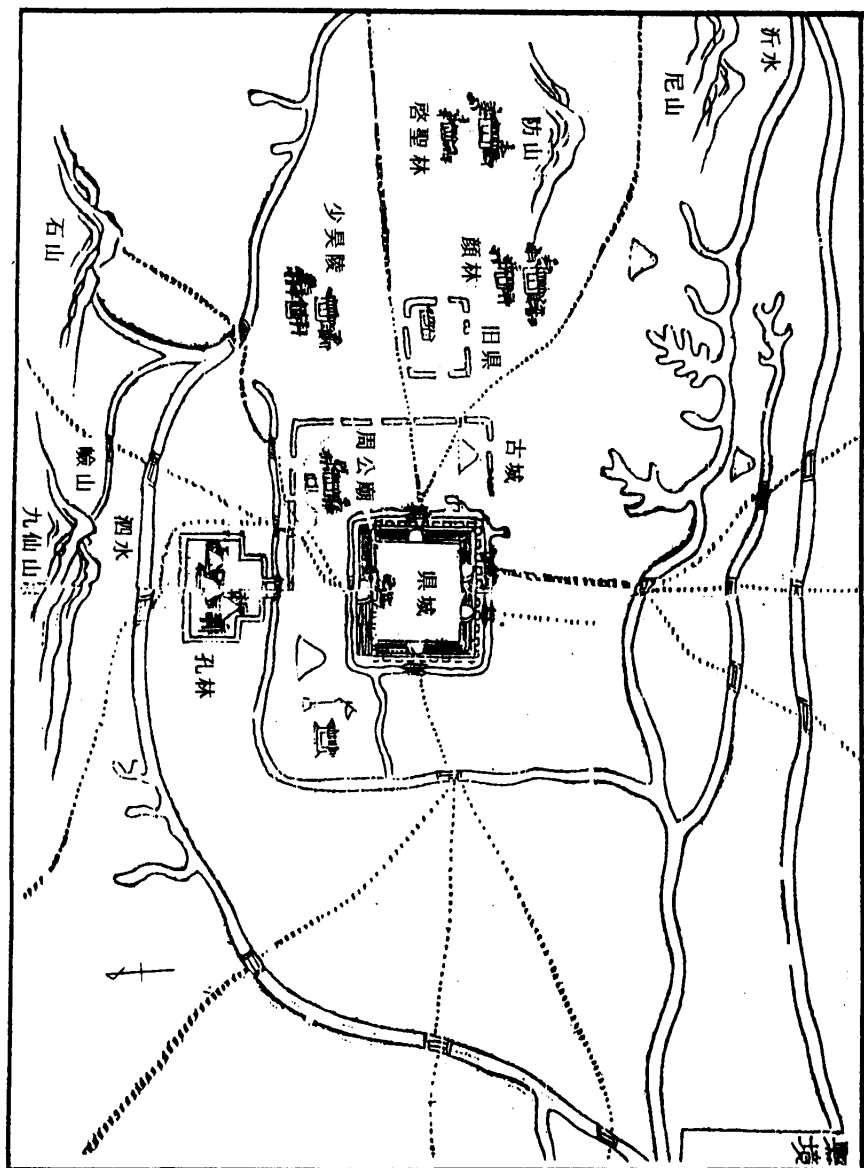


少昊陵

少昊陵（『曲阜縣志』卷四）

と曰ふ。左に魯公像ありて西面す。其の像は周公に比るに稍や小なり。右に亦た少像あり。何人たるかを知らず。廟域は四面に石を釐し⁽¹⁷⁾、地より高きこと二三尺。廟前の石階の両傍に更に廟あり。左に孝・煬・厲・猷・懿⁽¹⁸⁾・考・隱・莊・文・成・昭・定・悼・穆・康・卒・頃⁽¹⁹⁾の十七公神位を置き、右に幽・魏・真・武・恵・桓・閔・僖・宣・襄・哀・元・共・景・縉⁽²⁰⁾の十五公神位を置く。皆、多く荒廢す。衆尊、階を擁す。周公廟も亦た半ば蕪没す。柏樹の数本、屋上に生ず。廟の後に又た廟あり。亦た半ば崩潰し、神主、瓦石に没す。意ふに夫人の廟ならん。廟前に柏樹最も多し。大なる者は数牛を蔽ふべし。楷木・白楊木・白葉樹、間雜して生ず。直上は天を摩す。其の規模は孔顔廟に比するも勝つに及ばざること遠し。廟門を出で東行すること数百歩。顔氏の墓あり。東西七八丁、南北二三町。四もに牆壁なく、南に石門あり。其の中は墳墓累々たり。余、李葆和と墓間を行く。兎、前を走る。群童、犬を嚇かけて之を逐ふ。大声、諸処に発す。郊野に行くが如し。墓の東に一小村あり。名は故城たり。疑ふらくは魯の故城ならん。更に東のかた十町許、曲阜の東北二十町許に、軒轅村あり。即ち史記の「雲陽」の地なり。千余戸、焉に住む。東北に柏樹の鬱蒼たるを望む。是れ少昊陵⁽²³⁾たり。四も瓦壁に囲まれ、陵前の柏樹、路を挟みて連なること数町外。即ち上陵大路なり。陵地は南北一町半、東西一町余。南に木門あり。亦た三門を構ゆ。内門の左右に柏樹を列植す。進むこと数百歩にして門あり。左右皆に壁もて前後を隔絶す。門中の二碑は皆に「乾隆帝、少昊を祠るの詩」を刻す。門

より入りて行くこと数十歩にして敷石を用う。四方、二尺あるべし。四面より之を釐す。上に至るに漸く狭し。巔に一小祠あり。其の下は四面各おの十三四間、高さ約三丈。峻にして且つ滑なれば、登攀するべからず。祠に小像を安す。即ち少昊神位なり。祠の後は少昊陵なり。高さ二丈許。上に凹處あり。石、其の骨を露はにす。草莽繁茂せり。周圍、柏樹鬱葱たり。風景愛すべし。少昊より今に至るまで幾んど五千年。孔子の少昊に見ゆるを以て、今、孔子に見ゆるに比すれば、尤も遠し。夫子、陵を詣くるの意、果して如何。感慨に堪へず。低徊すること稍や久しくして乃ち去る。軒轅寿陵を問ふ。曰く、「軒轅県の古城祉に在り」と。行きて焉を觀るに、破壁、僅かに七八間。下に門ありて通じ往来す。上に閣あり。中に仏像を安す。門内に碑あり。題して「少昊故城祉」と曰ふ。更に小壁ありて、其の中に一小祠あり。三個の像を安す。瓦礫累積す。疑ふらくは寿陵、此にあらん。興尽きて歸る。魯公の墓を問ふも、人の知る者なし。書雲台は既に課士書屋⁽²⁴⁾と爲り、靈光殿も亦た基祉を存せずと云ふ。惜しむべし。顏真卿⁽²⁵⁾の墓を問ふに、所在は甚だ遠し。尼山も亦た東西四五里の外に在り。見るあたはず。時に人の來觀する者多し。中に二人あり。美服にして冠す。其の姓名官銜を問ふ。曰く「性は孔、名は憲悰、七品は執事官なり」と。一人を指して曰く「家兄なり」と。之に揖して進ましむ。孔子の得世を問ふ。曰く「今、七十世に至る」と。又た顔子を問ふ。亦た「七十世を過ぎず」と。城の圍、及び人数を問ふ。曰く「壁二十里、口兩万人なり」と。



曲阜縣圖 (「曲阜縣志」卷八)

- (1) 周公旦。文王の子、武王の弟。周王朝の基礎を築いた。
- (2) 伝説上の皇帝、黃帝のこと。
- (3) 牌樓のこと。
- (4) 孔子の子の末裔。
- (5) 客を案内する人。
- (6) 荻生徂徠（一六六六―一七二八）の著。
- (7) 蒲生君平（一七六八―一八二三）の詩歌を伊藤子固が編したものの。
- (8) 孔家の嫡子をこのように呼ぶ。
- (9) 清の三代目の皇帝。在位一七三六―一七九五。
- (10) 長さのこと。
- (11) 墓のいしぶみのこと。
- (12) 龍の装飾を施した柱のこと。
- (13) 冕冠のこと。
- (14) 玉をつないだ首飾り。ここでは冕旒のことか。
- (15) 大和朝廷の初期に活躍したとされる伝説上の人物。
- (16) 室内や門戸にかける額のこと。
- (17) 平たい石を敷きつめること。
- (18) 底本は「懿」に作るが『史記』三代世家により改めた。
- (19) 周王朝の歴代の王を示す。初代の武王から数えて八代孝王・一〇代厲王・七代懿王・三一代考王・一五代莊王・武王の父文王・二代成王・四代昭王・二一代定王・二五代悼王・五代穆王・三代康王・一九代頃王となる。
- (20) 二代幽王・初代武王・一七代恵王・一四代桓王・一六

代僖王・一一代宣王・一八代襄王・二九代哀王・二七代元王・六代共王・二四代景王となる。

(21) 孔子の弟子。顔回。字は子淵。十哲（德行）の一人。

(22) 『史記』帝王世紀のこととおもわれるが『史記』には該当の文はない。他の史書には多数見えることから、『史記』を史書の意で捉えた方が妥当であろう。

(23) 伝説上の皇帝。

(24) 官吏任用試験を受ける者のための勉強用の家か。

(25) 唐の忠臣、書家。七〇九―七八四。

(26) 位、身分のこと。

(27) 揖は両手を胸の前でくんで会釈すること。 (有馬)

※三頁・五頁の図は参考として有馬が挿入したものである。

一〇月二八日

二十八日。鄒⁽¹⁾県に赴かんと欲して果さず。余の為に衍聖公、書を贈るの約あるを以てなり。石刻の諸書を買ふ。暮に至るに閑寂甚だし。李葆和をして孔慶鐘を訪ねしむ。二次にして古詩一篇を賦す。其の辞に云々。此の夜、孔慶鐘、人をして詩と書及び「孔子家語」の石刻の書一帖を贈らしむ。曰く「今日、祭奠あるが故に候ふを得ざるなり。請ふ諒せられんことを」と。其の詩二首、一に曰く云々、二に曰く云々、又た一詩を附す。即ち衍聖公の世子の師袁保益の作なり。其の詞に曰く「詩あるも略す」。今夕、衍聖公、約に違ひて書を贈らず。蓋し亦た祭奠の故ならん。余、之を促すに、慶鐘曰く「余弟、既に公に告ぐ。明日必ず呈す」と。夜將に三鼓たらんとし、小雨瀟々とし

て声あり。

(1) 孟子(名は軻、字は子輿、子思の弟子に学ぶ)の出生地。

現在の山東省鄒県。

(2) 二度目のこと。

(3) まつり、まつりの儀式のこと。

(4) 底本は「詩」に作るが文脈から「詞」に改めた。

(5) 自己の謙称。

(6) 三更と同じ。現在の深夜零時前後の二時間ほどを指す。

(真銅)

一〇月二十九日

二十九日。蚤起して旅装を整頓し、公府へ抵らんと欲す。知県の邸を過ぎて、将に名刺を投じて去らんとす。李曰く「不可なり。蓋し知県の無情を厭ふなり」と。車を駆けて公府に向ふ。孔慶鐘の使、来り報じて曰く「我が主、公を促す」と。乃ち慶鐘を訪ぬ。孔氏の宗は六十戸。慶鐘も其の一と云ふ。僕人、命を伝へて曰く「請ふ見へて一叙せん」と。進みて門に入る。慶鐘、余に揖して一房に致し茶を出す。使を公府に遣はし、余をして其の歸るを待たしむ。筆談して時を移す。其の子も出で筆談す。慶鐘曰く「貴国の王は云々」と。余曰く「我が邦の皇統、一姓綿々として変ずることなし。中国は古より姓を易ふこと多し。是れ聖人の意に非ず。吾が国人評す「千秋万歳の後、中国に君臨すべき者は、必ず至聖の裔ならん」と。今、中国人に見ゆるに、輒ち此を説くべからず。然れども理を以て之を推さば、其の説、必ず驗あるものならん」と。慶鐘は微笑して答へ

ず。余、又た其の子に告げて曰く「今より後、中国の政を為すは、唐虞⁽³⁾以来の帝王の裔の上議院、天下の道術⁽⁴⁾ありて志を得ざる者の下議院を互角にして、合衆協同して、斯の民を仁寿の域に躋⁽⁵⁾らしむべし。此れ西洋の実より出づ。古に所謂「郷土庶民に詢⁽⁶⁾る」ものなり。又た其の西洋の諸大学の講ぜざるべからざるを陳ぶ。耶蘇⁽⁶⁾を防ぐは、聖学を明らかにするに在り。宜しく聖裔より發憤すべし。我邦に及びて文化日々に盛とならん。此の国は因循姑息にして、中華を自負するは迂濶なること殊に甚しきこと等、説く。之を聞くこと逆ならず、屢しば起敬せり。余を指して「大人」と曰ふ。自ら謙して「晩生」と曰ふ。良や久しくして酒を出だし、相ひ款して午餐を設く。情意懇切なり。時に婦女数人の戸隙より窺ふ人あり。中の一人は十七八なるべし。姿容絶美にして眼睛藹々⁽⁷⁾なり。意ふに是れ慶鐘の二女ならん。或は其の子の妻ならん。或は疑ふらくは仲尼の裔ならん。猶ほ逸居して色に耽する者か。然れども慶鐘の衣を見るに袖頗る垢弊して三品の官に似ず。其の他、孔氏の諸人、蓋し皆貧困にして、衣食に勞するなり。衍聖公の録を問ふに、曰く、「田三千頃⁽¹⁰⁾、官夫之を耕す。其の田は一処に止まらず。或は他県の内に在り」と。午後一点鐘、衍聖公、人をして詩と書、且つ聖經一套、『家語』『礼記』各一部、『杏壇帖林図』『廟図』各一張、著草一盒を副へて贈らしむ。其の詞に曰く云々、又た曰く云々。余、乃ち礼辞を書して、使者に一元半を投じて門を出でて之を送る。乃ち慶鐘父子に謝して去る。父子相ひ送り門外に到りて挨拶。余、車に乗る。余、辞して乗りて東門より出で城壕に沿

つて南進す。

- (1) 県知事のこと。
 - (2) ゆっくりと歎談すること。
 - (3) 堯(陶唐氏)と舜(有虞氏)のこと。上古の善政を行った聖帝として知られる。
 - (4) ここでは道德と学術のこと。
 - (5) 上の者が下の者に相談すること。
 - (6) キリスト教のこと。
 - (7) おだやかなさま。
 - (8) よげれやぶれてゐるさま。
 - (9) 一品から九品まである官吏の等級を示すもの。
 - (10) 広さの単位。清代では一頃が六一四、四アール。
 - (11) 聖經は聖人の著した経書。ここでは一套(ひとそろい)とあることから、十三經注疏あるいは四書五經のことか。
 - (12) 杏壇は孔子教授堂の遺址。後に殿・大殿が建設される。転じて講学の所を言う。ここでは曲阜の聖廟前の杏壇を描いた図のこと。
 - (13) 聖廟内を描いた図のこと。
 - (14) 易占いの用の筮竹のこと。
- (有馬)
今日開市に属し、諸物を鬻ぐ者市に盈つ。時に余の車、売鈍の器に触れ、器倒れ鈍散る。其人怒りて車を留む。出錢して之に謝す。行きて城東の南隅に抵り、東のかた一町外を望むに、小阜、田間に連なり亘る。或ものは高く或ものは低し。之を問ふに則ち曰く「旧曲阜の魯公の城址なり」と。南稍や西に行

くこと十四五町⁽²⁾にして村あり。玉河崖と曰ふ。人家二十戸許。村を過ぎ東稍や西に進むこと十町なるべし、路の左に碑あり。題して「舞雩壇³⁾」と曰ふ。東のかた望むこと五六町外に舞雩壇あり。車より下りて、行きて視るに、土の高さ二丈なるべし、方一町なり。上に二碑あり。皆に題して「舞雩壇」と曰ふ。側の一碑は、題して「聖賢樂趣」と曰ふ。皆に明人の建つ所に係る。上に柏樹六本槐樹四本を見るのみ。壇上より北稍や西の乱石崖村を瞻望するに、村の後の山は、西方の鳳凰山以南の山に走る。蜿蜒として東より南に向ふ。勢は遊龍の如く曲阜を囲む。曲阜を距つること四五里なるべし。西方の平野千里、極目するも際りなし。村落樹木相ひ望む。時に涼風舛に適ひ、頗る爽快なるを覚ゆ。暮春に徴すと雖も亦た曾点の意思の如何を想像するのみ。少頃して、去りて又た西南するに故道を取る。一河あり。広さ二十間なるべし、数条の小流潺々として声あり。深さ僅か二三寸。多くは沙洲なり。意ふに是れ必ず沂水ならん。土人に問ふに果して然り。石橋あり。長さ二十間なるべし、広さ一間半、高さ二三尺に過ぎず。想ふに往昔聖門の諸子、此の水に浴し、屢しば往来して風景を賞す。感慨に堪へず。又た尼山を問ふに、則ち東方数里の外の一山なり。甚だしくは高からずして、山上に廟あり。又た行くに、一村あり。百姓阜たり。人家十余戸あり。次いで二十余戸あり。北宮阜たり。又た七八十家あり。南宮阜たり。蓋し南宮氏北宮氏の故里ならん。次いで三百家許あり。小学庄たり。千余家あり。阜村たり。路、田より低きこと概ね二尺なり。平正ならずして、地勢平坦、其の土

赤埴にして甚だしくは肥沃ならず。民は麦を種え、或は稻を収む。頗る淳朴の風を帯ぶ。茅屋の間に瓦屋を見ることが多し。諸村概して阜と称すも、実は岡阜なし。南宮阜を過ぐるに及び、遙かに西南を望むに、小山東西に亘り、烟霞中に隱見す。南方に阜山在り。傍らの山上、樹木鬱蒼たり。之を問ふに、則ち馬鞍山なり。孟母墓、其の陰に在り。車を駆けて山下に至り、柏樹の間を行くに、孟氏の墓極めて多く、孟母の墓は其の中央に在り。上に柏樹三十四五本生ず。墓の高さ一丈四五尺、周は九十歩なり。前に四石碑あり。一は則ち文字漫滅す。其の余は、明人の建つる所に係る。正中の碑、碑に題して「大明國宣獻夫人墓」と曰ふ。石阜あり。広さ七八尺、長さ一丈、高さ四五尺なり。前に石香炉あり。孔子の墓に比して甚だ大なり。墓地甚だ広し。東北に石門を建て、祠宇を営ず。然るに柏木の中に鬱没す。且に日の暮るるに遇ひて、尽くは觀るあたはず。遂に樹間より山に攀りて上ること二三丁にして頂に登る。往來を望觀するに、曲阜より此に至るまで凡そ三四里、皆曠野なり。東南の山脈相ひ連なり、亦た甚だしくは遠からず。風景絶佳なり。馬鞍山は皆巖石にして或ものは起き、或ものは臥す。嶽巖磊鬼として、着靴するも行過すべからず。山下亦た石礫多し。日暮に山を下り、一店に就きて宿す。聞くに孟子廟は此の地に在り。行きて觀る。路傍に煉瓦門あり。左右に煉瓦を疊む。屋を其の上に構ふ。題して「孟子故里」と曰ふ。門に入り、西行すること一町許にして、孟子の故宅あり。南北三十間、東西十間、四周に壁ありて、南方に門あり。左右斜めに斜壁を起つ。入らん

と欲するも、門既に閉じて果せず。門前に小池あり。南より西北に向かひて廻繞す。門を過ぎて西に小流あり。板橋を架く。碑あり。題して「寧沢橋」と曰ふ。側に大石あり。状、臥像の如し。宅中の柏槐諸樹蔭を成し、既に暗く、仔細を弁ぜず。即ち去る。孟子此の地に生まる。故に孟子の裔孫甚だ多しと云ふ。村民の來り觀る者甚だ多し。皆、頗る淳朴たり。然るに亦た未だ野蠻の流たるを免れず。遺憾と謂ふべし。客舎に牀なく、葦筵を地上に布きて寝る。

(1) ウドン の傍訓は朱筆による。

(2) 一里は清代においては三百六十歩(約五七六メートル)、一町は六十間(約一〇九メートル)なので、それぞれ一七二八メートル、一五二六―一六三五メートルとなり、後者の方がやや短い、ほぼ同じということになる。

(3) 雨ごいをするための舞台。

(4) へびのようにうねっているさま。

(5) 孔子の弟子。字は皙。

(6) 溪流の流れるさま。或いはその音。

(7) 山が高くそびえ、けわしいさま。

(8) 底本は「煉瓦」に作るが文意により改めた。

一〇月三〇日

(真銅)

三十日。午前五点钟。馬夫を呼び起す。暗黒にして路を弁ぜず。待ちて六点钟に至る。再び孟子の故居を訪ぬ。將に其の中に入らんとす。出でて觀る者頗る衆く、人の周旋する者なければ終に止めり。土人、我が異粧を觀んと欲す。則ち其の教ふべ

きを知る。然れども古を吊す意を共にする者なし。嘆くべきなり。南稍や東して行くに、道路凸凹にして、忽ち広く忽ち狭く、或は偏り低く或は沙漠にして往々車を通すべからず。土氣赤垣にして、前に見し所に較ぶるに、少しく礪確なるを覚ゆ。時に日輪、東山より出づ。顧眺するに馬鞍山は東南の山脈を以て廻繞し、高下の起伏、十数里に綿亘す。地勢は曲阜に比べて甚だ狭し。旭日曠々として、四方に斜射す。輕烟の樹に籠るものは漸々として將に散ぜんとす。景色、画の如し。西南の曠遠、一山も見えず、太平円を成す。南に一峰の秀でて出づるあり。巖石峨々として、半天に聳拔す。即ち鄒県の嶧山なり。『史記』始皇本紀の「碑を鄒嶧山に建つ」とは是なり。行くこと二里許、小山あり。崗山と曰ふ。道路、最も傾仄し、沙、地に満つ。山上の大石、或は鳥の翻するが如く、或は獸の怒するが如し。往々にして地勢突起す。井然として正しく距離を定めたるが如く、墳墓を横列するものなり。此を過ぎて右の傍に十町外に堂閣あり。玉皇堂と曰ふ。南稍や西のかた二十町にして難県に達す。阜山より二十八里と称す。此の間の數村は、皆數十家許。中に孟母庄あり。即ち孟母の隣を挾ぶ處なり。午前十點鐘、鄒県の東門より入る。市街を過ぎて南門より出づ。小流あり。石橋を架く。橋の北に門あり。木を用いて三門を構ゆ。上に題して「三遷故地」と曰ふ。左に二碑あり。一は題して「子思子」【中庸】を作る處」と曰ふ。一は題して「孟母斷機の處」と曰ふ。過ぎて行くこと五六町、右に孟子廟あり。老柏參差し、槐樹と間雜す。余、孟子の裔、五經博士某に見えんと欲し、洛南守備孟広文に

信を齎⁷りて、因りて某を訪ね、其の書を出だし、且つ名刺を投ず。人、出でて命を伝へて曰く「昨夜、故ありて寝ねず。今方、眠りに就く。請ふ、未の時を待ちて又た来れ」と。其の実、阿片を食す。臥して云へば乃ち去る。孟子より伝はりて此に至るまで七十一代と云ふ。孟子廟を謁す。規模は顔子を髣髴^{ほうふつ}するも、精麗なること顔廟に勝ること遠きこと甚だし。石柱二十二本は皆石鼓を以て之を承く。廟前の柱は菊華を鐫る。龍柱なし。孟子像、儼然として廟中に立つ。樂兔子、左に在りて西面す。廟前の左右に殿あり。中に神仙數十を安す。題して「先賢某氏先儒某氏神位」と曰ふ。皆孟子の門人なり。壁を隔てて、一殿、孟子の父を祭る。右は則ち孟母なり。傍らに孟子の少なき時の影像を立つ。廟後に夫人の神位あり。廟前に一柏樹の枯朽して存す。骨の高き二丈、周三尺。石垣廻^{めぐ}る。孟子の手植に係ると云ふ。石磴を下れば其の下に井あり。囲むに石欄を以てす。側に碑あり。題して「天震井」と曰ふ。相ひ伝ふるに康熙十一年、雷鳴震動の後、此の井現はると。蓋し空氣室氣の相ひ激して致すなり。然れども怪しむに足らざるなり。多くの樹木は槐樹たり。囲むは三楸樹・白東樹なるべし。森々として林を成し、石碑も亦た甚だ多し。刻を移して去る。斷機堂に到る。方、二十間なるべし。前に河を帶ぶ。河の側に石欄を周す。「垂聖孟子洗硯池」の七字を記す。堂は南面す。高さ三間、長さ六七間。中に宣獻夫人神位あり。孟子は其の右にありて西面す。堂の左の壇の上に亭あり。白楊四本あり。高きこと天を制するが如し。柏槐樹、數株あり。風致、賞すべし。其の東のかた一町、子思

廟あり。大きき断機堂の如し。子思は南面し、孟子は西面す。廟の側に槐柏数株あり。亦た美觀なり。唯だ此の国の風は人の廟に入るを赦さず。入る者あらば錢を要す。然らざる処なし。厭ふべきのみ。去りて午飯す。一点鐘。又た博士を訪ぬるに、又た見ゆるを得ず。蓋し鴉片の未だ醒めざるなり。因りて謝して曰く「明年、再び候す」と。乃ち發す。聞くに此の人は衆の惡む所と爲る。与に談ずるに足らざるなり。孟子の墓を問ふ。則ち東南二十五里の外の石山の頭に在り。澹台滅明の墓は人の知る者なし。遂に發して西北を指して行く。一里半許、一百四五十家あり。廟護宝庄たり。又た一里半許、一千八百家あり。店上庄たり。土地、殷賑¹⁰たり。又た二十町許、七八十家あり。双橋たり。又た二十町許、八十家あり。二十里館たり。道路、寬坦にして、土性肥腴たり。又た二十町許、数十家あり。大師屯たり。又た十町許、二三十家あり。小沢村たり。又た二三十町、数十家あり。五里宝たり。又た二三十町にして兗州府城の東南に出づ。一河あり。広さ一丁許。水の広さは二三十間に過ぎず。即ち泗水なり。此の水、随ひ長く随ひ消ゆ。常流なくして濟寧の東南に至り、濟寧を去ること五里にして運河に入ると云ふ。石橋あり。長さ二十余丈、広さ一丈半なるべし。高さ二丈。左右に石欄を設く。石の獅子、各おの二を列す。甚だ宏壮たり。橋の傍らに人家数十戸あり。日暮に会ひて細かに視るあたはず。夜に乗じて城中に入る。知府を訪ぬ。豫山の書を呈す。時に李保和をして先導せしむ。待ちて時を移す。蓋し事の倉卒より出づるを以ての故に、狼狽して時を費すと云ふ。余、濟南

・泰安・曲阜・兗州・濟寧等の戸口を問ふ。曰く「濟南・泰安は私の轄する所に非ざるが故に知るあたはず。曲阜は三十余万戸」と。余又た問ふ「此れ県内の惣数か」と。曰く「然り」と。而して兗州・濟寧は答へずして失す。蓋し兗州府は、城壁は方二十里、人家は一万と云ふ。鄒県より此に至るまで五十里と称す。

- (1) 土地が瘦せていること。
 - (2) 底本は「挾」に作るが文意により改めた。
 - (3) 夜の明けたるさま。
 - (4) 孔子の孫。名は汲。『史記』孟子列伝には孟子は子思の弟子に教えを受けたとある。
 - (5) 所謂「孟母三遷」の故事の場所のこと。孟子の学習環境を考え、母が三回引越しをしたもの。
 - (6) 「孟母三遷」とともに孟子とその母にまつわる故事。学問を途中で止めることに對する戒め。「断機之戒」とも言う。
 - (7) 手紙のこと。
 - (8) 一六七二年。清の四代目康熙帝は在位一六六二—一七二二年。
 - (9) 孔子の弟子。字は子羽。『論語』雍也篇に見える。
 - (10) 土地が肥えていること。
 - (11) すべて山東省の地名。濟南はその省庁所在地。(有馬)
- 十一月一日
十一月初一日。天陰るも雨ふらず。前夜、知県林某の使ひ来りて報じて曰く「明日断じて行くを得ず。已の刻に知府知県皆

に来るべく候ふべければなり」と。因りて早く発ちて知県を訪ぬ。其の厚意を謝して、見えずして去らんと欲す。知県強ひて止む。因りて進みて面晤す。知県曰く「請ふ一日を緩にして便饌を供ふべし」と。余、其の踟躇すべからざるの意を陳ぶ。昨、鄆県を發つに、知県、護照を見すを要す。余曰く「兗州知府に請ひて、報告す」と。乃ち直ぐに来る。故に其の由を告ぐ。且つ告げて曰く「此より以南は、必ずしも知府知県に報ぜずして可なり」と。遂に辞去す。此の地、昌平城を有し、濟寧に女媧陵を有すと聞く。見んと欲して県令に問ふに、答へて曰く「僕新たに来るが故に道を知らず」と。因りて李葆和をして探問せしむ。皆知らざるなり。魯公城址に在るを知る。北方半里許に在り。往きて見る。皆、墾ぜられ田と爲り、東北の二処僅かに壁の存するあり。甚だ寂寥たり。車を廻らせ、南進して街を過ぐるに、復た美店の人を驚かしむるなし。人徒の往来雜遝し、泥濘汚穢なり。一店に就きて蒙山苦茶を買ふ。茶葉頗る広く、苦きこと甚だし。其の実は根に在りて、土を穿ちて生ずと云ふ。南門より出づ。其の壁の厚は、濟南府に異ならず。蓋し山東省の諸城、濟南に次ぐは登州、次いで兗州、次いで青州にして、登州の重鎮たるは近世に創始すと云ふ。南に行くこと十五六町、五六十家あり。武芸村たり。又た三十余町、二三十家あり。報家林たり。稍や南に四百余家あり。八里鋪たり。又た南稍や西に二十町許、三四十家あり。道營たり。又た一里半許、百余家あり。三十里鋪たり。又た十五六町、四五十家あり。栓園たり。又た二十四五町、二十余家あり。孫子店たり。又た二十町許、

一村の路の左右に在り。左右各おの二三十家あり。南北家窪たり。此より西南に方五十町なるべきは人家なし。甚だ広曠として土黒く、車の轍、道路に充塞す。又た三十町許、數家の村あり。村の南に小流を見る。石橋を架ぐ。又た三十町なるべし。濟寧に達す。一店に投ず。美店に投ぜんとするも得ず。板を敷きて牀と爲す。高糧の幹を其の上に列ねて、坐と爲す。兗州府より此に至るまで六十里と称す。土地広坦なり。東望するに、鄆魯の山脈、蜿蜒起伏し、西南遙々として小山点綴し、其の間の樹木村落相ひ望む。甚だ広豁たり。土性肥良にして耕耘甚力す。道路の広狭は一ならず、大雨に遇はば恐らくは泥濘の憂ひあらん。濟寧城の周圍二十里、二道の圈子あり。一は四十里、一は三十里にして、人家三万余、豪商多く住む。東に会通河・南池・洪字湖・南陽湖等あり。相ひ接し連なる。此に在りて遠望するに、一望無辺なり。周圍を舟行するに二日程と云ふ。今日路上にて屢しば水光の明滅するを望む。水の浅きは底なるべく、深きは底なきなりと云ふ。問ふ「是より歸德府に至るに幾里か」と。曰く「本大路より走ること三百八十里、而れども本大路は、大清河と黄河と氾濫するが故に大車行くことあたはず」と。此の際の兵數を問ふに「兗州府を除くの外、數県を合せて凡そ三万」と云ふ。是の夜、知州の使至りて曰く「面晤するを欲するや否や」と。余曰く「邑に行きて匆々には謁見を請はず」と。

- (1) 同じ所をぶらぶらして進まないでいる様。徘徊。
(2) パスポートの類。

(3) 中国の伝説上の女帝。

(4) 高梁のことか。

(5) 底本は「地」に作るが文意により改めた。

(真銅)

二月二日

二日。快霽。早旦^一。李葆和をして知州に抵り女媧陵の所在を問はしむ。曰く「東南のかた三十九里の外に在り」と。曰く「見ず」と。東門より城に入り、李白の酒樓を南壁の上に望む。壁を攀りて行くこと五六町、復た奇觀なし。半途にして止む。壁土より四顧するに、城中甚だ広く、人家狀麗なり。馬を驅けて街に至る。繁華なること兗州の比に非ず。忽ち見る、數十人の馬に跨がり、鎗を携へ、弓銃を提するを。銃の長さ二尺半なるべし。其の跡、灣曲し丹を以て之に塗る。行きて知州の前を過ぐ。李葆和をして名刺を投ぜしめ、礼に答ふ。知州、李に見へんと欲して時を移す。余、怒りて李を喚びて曰く「李姓は生^二と同行するに係る。生、行色^三せんとして匆々なれば久しく候つあたはず」と。即ち他を拉して去る。幸ひ罪を為すことなく、差役の来り留むるも顧ずして発す。蓋し知州は余に見へんと欲す。虚飾、移るが故なり。西門より出づ。運河の傍の二木橋を渡る。西南のかた十町許。人家、陸續として相ひ属す。僅かに人家を離れ、運河を右に望みて行く。河の広き七八間。兩岸の堤、路より高きこと三尺なるべし。里許、人家二百許あり。東岸に連なり亘る。五里營たり。濟寧より五里と称するが故に此の名あり。又た里許、五十家あり。十里鋪たり。河を隔てて北に湖を望む。周、一里許なるべし。是れ西湖たり。又た一里半

許なるべし。二千余家あり。安苧鎮たり。命じて午餐に鯉魚饗を食す。味美にして他郷に異なる。此より運河を見ず。蓋し河は西北に向ひて転ずるなり。大車の牛馬四五頭を駕して至るを見る。華苞を用て塩を盛る。満載して上に泥を塗る。之を問ふに、則ち塩の漏るるを恐るるが故に路泥を堀りて之に塗ると云ふ。穢なること想ふべきなり。又た行くこと十余町、数家あり。其の名を知らず。岐路あり。南北に分かる。皆嘉祥往來の由る所なり。北路は河を過ぎ、南路は河を過ぎず。因りて南路を取る。西稍や北に向ひて行くこと三十町なるべし。二百五十家あり。新泰和たり。小流あり。石橋を架く。趙王河たり。又た西北のかた行くこと七八町、二十家許あり。盛家庄たり。又た三十町なるべし。三十余家あり。周村鋪たり。家の傍に多く李あり。又た三十町なるべし。三小村を過ぐ。北方に山を負ひ、村落相ひ接す。以て嘉祥に連なり、濟寧に出づ。西南のかた五六里の外を望めば、小山、南東より南西に横たはり亘る。凡そ三四里なるべし。其の北に又た小山あり。西南より東北に連なる。凡そ二三里なるべし。此に至りて形勢一変す。舊だ丘山重疊するを見るのみ。又た行くこと四五丁にして嘉祥に達す。濟寧より此に至るまで四十五里と称す。城壁の周圍八里。人家二千五百あるべし。城壁は山を包みて高く山上に連なる。東門より入りて行くこと二三丁。右に曾子廟あり。

(1) 底本は「且」に作るが文意により「旦」に改めた。

(2) ここでは氏と同義。

(3) ここでは一人称。

(4) 旅立とうとすること。

(5) 土地の治安を取り締まる下級吏員のこと。

(6) 孔子の弟子。名は參、字は子輿。

(有馬)

即ち曾子の住みし所の処なり。南北約一丁、東西三十間なるべし。石壁四周す。前門中門皆に南に面す。廟の長さ七八間、高さこれに称ふ。中に曾子の像を安す。子思西面し、孟子東面す。其の前の左右に殿あり。曾子の孫を祭る。後に夫人の神位あり。屋瓦頗る荒蕪す。廟前に老柏十数株あり。碑石多からず。曾子の墓を問ふ。曰く「南武山下に在り」と。此より距つること八里なり。遂に廟後の山に登る。即ち嘉祥山なり。高さ二三丁なるべし。巖石參差し、柏樹点綴す。上に元帝祠あり。傍らに石仏數軀を置く。甚だ畏怖すべし。庭を行きて四顧するに人なきこと極まれり。山羊あり。兒を抱へて臥す。余の異粧なるを見て兒を捨て驚きて去る。戯れに其の兒を捕ふ。母羊大きく叫びて余の前に至る。狼狽愁傷して、或は去り或は来り、或は石頭に立ちて其の主を喚ぶの状あり。甚だ悲愴なり。乃ち放ちて去る。門より出でて四望するに、南方に南武山あり。即ち武城旧山なり。東南より西南に走りて尽く。山脈重疊して其の尾に丘陵の如きものあり。是れ澹台山たり。澹台滅明の故居、其の下に在りと云ふ。城の西南に一河の明滅するあり。名は澹台河たり。北西及び西北の二方に二山あり。東に亦た山脈の伏起するあり。遠く其の尾に一峯を望む。柏樹の状、疎にして、上に玉皇廟ありと云ふ。又た東南杳靄の中に一小の横たはり亘るを望む。時に快霽にして、東北西の三面、山外の郊野歷々として

目に入る。而して其の遠きものは朦々として烟霞の中に在り。

我が邦には未だ曾て見ざる所なり。良や久しくして去る。履を脱し、巖に攀る。而して下の各家人争ひ出でて觀る。或は岩に攀りて来りて迎ふる者あり。鹿を逐ふ者にして亟かなり。遂に一店に就きて宿す。余を送るの官隸来りて錢を要して止まず。前日も来りて屢しば此の要錢の事あり。或ものは給し或ものは給せず。毎々義を以て之を責む。然れども終に其の意を満たさざるなり。困りて遜して辞して告ぐるに、囊中無錢なりと。彼亦た拝し謝して去る。然るに余、今日侘柿子六箇を食す。之を償はんと欲するに、受けずして去る。意、殊に快々なり。困りて書を知州に投じ、之を償はしむ。其の文に曰く云々と。

(1) 底本は「四周石壁四周」に作るが文意より上の「四周」を削除した。

(2) つりあいがとれていること。ここでは長さにみあつた高さがあること。

一 一月三日

(真銅)

三日。詰朝^①。駱子を請ひて嘉祥を發す。蓋し濟南に車を雇ひて元宝銀二十一兩を給す。而るに敝車・羸馬^②にして遠きを行くに堪へず。馬夫も手に瘡ありて快く行くあたはず。故に別に雇ふ。駱子の主人をして代はりに往かしむ。西門より發す。西稍や南のかた行く。左に澹台山を望む。又た西稍や北のかた行くこと里許、又た一山の下に抵る。二三村あり。相ひ望むに其の地は東南に面し、風景、愛すべし。東北の隅の一村、名は曹家村たり。此を過ぎ山を繞りて行くこと十町なるべし。三四十家

あり。名は黄家岡たり。又た数十町、一百家あるべし。屯樹集たり。此の間の路、多く泥濘す。長樹集の東に高阜を負ふ。其の上に一廟あり。頗る勝槩を占む。之を問ふに、則ち人祖廟と云ふ。其の東南の山の外に一寨あり。人民、之を築き、賊を避くと云ふ。行くこと一里許。五六十家あり。林、半ば枯れ、村の風景は荒涼たり。又た里許、七八十家あり。何家坊允と曰ふ。又た十町なるべし。十余家の一村あり。更に行くこと二十町なるべし。百余家あり。趙樓たり。午、此に飯す。牛肉を食す。嘉祥より距つること三十里と称す。又た行くこと五六十町許、二小村を過ぐ。西行して鉅野に至る。一里半なるべし。趙樓より鉅野に至るまで二十五里と称す。此の間、泥濘凝固し、村落の間も往々にして又た泥深く、七八尺に及ぶ。雨中に行くの難きこと想ふべきなり。土性黄埴にして、甚だ膏沃なるに似る。而るに耕耘せしは甚だ罕なり。

(1) 明け方、早朝のこと。

(2) 底本は「僮」に作るが文意により「請」に改めた。

(3) 座席の高い車のこと。

(4) 疲れた馬のこと。

(5) すぐれた景色のこと。

(6) とりでのこと。

(有馬)

小柳叢生し、或は田に麦を生うるを見る。柳と共に生う。之を李に問ふ。曰く「此処の周八百里、黄河氾濫すること十余年、稼禾収せず。人民の餓死するもの甚だ多し。往々にして賊盜、中より出づ。国僧王爺、此の地に死す。今年の春、丁大人の領

皇、銀六百万両を上し、黄河を修理す。工、完する後、秋禾に至る。少なきも、能く収を得」と。鉅野県の城壁、周圍七里余にして人家亦た一千四百戸、城壁破壊し、人家荒陋として觀るに足るものなし。其の貧知るべきなり。聞きて、獲麟台及び金卿山・清涼洞の所在を問ふ。則ち曰く「獲麟台は東南のかた十五里に在り。金卿山・清涼洞は並びに東南のかた五十里に在り」と。稍や休みて、南門より出づ。西稍や南して行くこと三里半なるべし。四小村を過ぐ。一千家あり。戴邑たり。日暮に會ひ、宿す。鉅野以来、遠見するに、民家の婦人陸続として至る。杖を曳きて行歩し、或ものは杖の頭に赤木綿を懸く。方一尺なるべし。或ものは青白木綿を用う。「祈自福文」と書して旗となし、或ものは杖に筐簾を担ぐ。香紙を携ふ。概して皆、老嫗にして、男子を見ず。之を問ふに則ち「明日は鉅野城の隍神の大会に當るが故に、城武より来りて、香紙を焼くなり」と。

(1) よく実った稲のこと。

(2) 底本は「跛」に作るが文意により「破」に改めた。

(3) 養蚕の器具。桑の葉を盛る箱。

(真銅)

一二月四日

四日。味爽¹。南西のかた行くこと五十町許なるべし。二小村を過ぐ。見るに、方、六七十なるべし。平野広漠、土地境薄²にして、往々にして耕さず。間に土の白粉の如きあり。生草、甚だ少なし。蓋し洪水の致す所ならん。田に陰柳を種う。葉は松葉の如くして細し。高さ五六尺なるべし。叢生して地を挾ばずして生ず。筐筥及び日用諸器を作ると云ふ。吏役の余を送る者

ありて、馬夫と相ひ話して行く。李葆和、之を聞き、筆を把りて余に示して曰く「官人説く、嘗て銀糧を送解するを護りて此の地に在りしに、賊に奪はれて去る、と」と。蓋し知る、草賊の此の地に出没するを。此を過ぎて数十家あり。畢家花園たり。花樹を養ひて之を他処に鬻ぐと云ふ。過ぎ去りて之を覚る。以為へらく遺憾たり。又た行くこと十町。千余家あり。張鳳集たり。四周、土壁あり。蓋し此の際は二三百家の聚落毎に必ず土壁を設けて、皆、寇を防がんと欲すと云ふ。此の地、頗る殷賑にして晝を■して、市を立てて粥を鬻る者甚だ多し。国の風俗は一日に二食。行旅、早発すれば、食を待つ者なし。村落、皆、鬻粥及び蒸餅の者あり。或は立ちて食し、或は踞まりて喫す。衆人、鬻々として盆碗を路上に列す。陋なること甚だし。又た行くこと五六里なるべし。七八村を過ぐ。南路集に至る。人家、千余家あるべし。其の土、白壤にして飛揚し、人の鼻目を撲つ。往來の苦しきこと甚だし。南路集は、千余なるべし。鉅野は固より貧県と称す。今日、經し所の村は、家、皆、矮陋にして、遼東に異ならず。土屋半壊す。午の時、此に飯す。更に行くこと二里なるべし。路を夾みて村落あり。人家、甚だしくは多からず。更に行くこと三十町許。五百家あり。郭家樓たり。樓ありて遠望す。故に名づく。村には入らず、右転して行く。土人の井を汲む者あり。馬夫、請ひて之を飲む。李葆和も亦た飲む。後に馬にも飲ましむ。余、口、渴くも、其の瓶の路上に置き、直ちに水中に投ずるを見て、飲むに忍びず。余、李に謂ひて曰く「器を路上に置きて直ちに水中に投じ、水を掬みて之を飲む

は、糞土を食すと何ぞ異ならん。中国の風は、皆然るか。且つ牛馬と飲器を同じくするは何ぞや」と。

(1) 明け方のこと。

(2) 土地がやせている様。

(3) 租税(年貢)のこと。

(4) 送り届けること。

(5) にぎやかなさま。

(有馬)

李曰く「山中の民あり。少水の処にて、嘗て山外に出でて、一里して水を打ち去る。辛苦殊に甚だし。夏日、雨落ちて地中及び盆中に在るもの、民争ひてこれを飲す。不潔なること更に甚だし」と。余曰く「淨器を以て之を儲け、雨水を清くすると莫し」と。李、路傍の潦水を指さして曰く「山民の飲む所は即ち是なり」と。四五十町に、数十家あり。林家庄と曰ふ。白項の鳥の甚だ多きを見る。此の鳥、濟南府を過ぎてより、此に至るまで、益ます多く、鴉群の三の一は則ち皆白項なり。又た一鳥あり。鵠の如し。其の毛白黒にして、鴉と雜処す。其の名を知らず。城武の西より出づ。左転して東行し、又た西して東門より城中に入り、西門より出づ。日既に没す。遂に宿す。南路集より四十五里と称す。城壁の周圍十二里、人家千余戸あり。前、曲阜に在りしに、河南大路を問ふ。曰く「濟寧より金卿を經て、城武に抵る」と。疑ふらくは今誤りて迂路に出でんや。李葆和を難す。李曰く「水ありて行くあたはず。大車必ず便路を走ればなり」と。濟南府以来、逆旅の荒陋なること、大いに前より甚だし。曲阜知縣に請ひて、美店を挾ばしむるも、店、

周に廁の設けなし。豚柵中に脱糞するに、豚来りて糞を争ふこと、猝々然たり。恐らくは夫子を祭るに亦た或は此の豚を用うるなり。糞を食して汁を飲すらず。汁を用いて肉を醢さい中に洗ふ。而してこれを食す。此に到りて、其の陋なること最も甚だし。

四壁崩頽して、風を遮るあたはず。障戸毀壞して、鎖せず。点燭に卓なく、紙捻を土器の油滓堆積の中に投じ、以て光明を取る。其の盃碗は、未だ嘗て洗濯を経ず。命じて之を洗はしむ。

則ち帶或は手帛を以て之を拭く。食卓の如きは、始作せしより来りて拭払を経ず。汚垢積もり累なる。勢、凸凹を成す。汚穢なること名状すべからず。臥すに席なく、葦筵或は高糧の幹を土上に布くのみ。此の夜、土人の来りて觀る者甚だ多し。命じて戸を鎖すも益ます来りて去らず。水を以て之に澆ぐ。漸く散る。既にして又た来り集ふ。日記を作すと欲するも、如何ともすべからず。然るに、衆人皆笑ひて来る。而して余、独り、不平の顔色ある者なり。豈に本意ならんや。

(1) 溜り水のこと。

(2) 項はうなじ。首筋のうしろの白い烏。

(3) 薄い酒のこと。

二月五日

(真銅)

五日、早起し沃盥いせんと欲するも湯水なし。前日、客舎亦た湯なし。尚ほ前夜の余湯あり。面を洗ひて此の舎に至る。則ち盛水器なく、碗を用いて湯水を盛る。陋なること尤も甚し。六点鐘、面を洗はずして発す。西稍や南して三時の間に三小村を過ぐ。安龍集に至る。城武より四十里と称す。人家千有余戸。

平坦にして山を見ず。往往にして白粉を撒くの状となす。羊の麦を食するを見る。蓋し雪前に禁ぜずして雪後に之を禁ぜしならんと云ふ。城武の近くは皆李桃・葡萄を植す。昨、南路集に在しに一处に架くる葡萄棚を見る。十一点鐘、安龍集を発す。此より曹県に抵いたるまで数村を過ぐるも約す。三点鐘、曹県に抵いたる。安龍集より四十里と称す。地勢初めの如し。村落相ひ望みて頗る多し。曹県の城壁、周十一里にして人家七八千あるべし。莘仲城・漆園等の故蹟を問ふ。人の知る者なし。仲弓墓を問ふ。曰く「県治しの北十余里に在り。成湯陵は東南十八里に在り」と。将に成湯陵に赴かんとす。徑路を過ぎ、驅馬して行く。

(1) 水をそいで手を洗うこと。

(2) 孔子の弟子。冉雍。仲弓は字。十哲(德行)の一人。

(3) 県庁所在地。

(斎藤)

三四十町なるべし。土塘いの東西に横たはるあり。其の外に小村二三、相ひ望む。日の没するに会ふ。四顧するに曠々たる平野なり。樹木多からず。遙かに村燈を認む。人語を聞き則ち喜ぶ。四五十町にして村あり。柿樹多く、人家二三十。月色蒼茫として僅かに屋背を窺ふ。此より十七八町。土山集に達す。即ち湯陵の在る所なり。人家二百八十余戸。四周土塘あり。曹県より十八里と称す。而るに遠きこと甚だし。李葆和をして其の故を問はしむ。則ち曰く「南京より北京に到り、濟南より河南に到るは皆、大路に係る。皆、已に丈量じして過ぐ。小路は未だ丈量せずして過ぐ。土人は幾里を約して即ち幾里と説く。嘗て土人ありて三十六里と説く。一たび経て丈量するに、即ち七八十里

なり。此の路も亦た有は十八里と説く者あり、有は二十一里と説く者あり、有は三十余里と説く者あり」と。一舎に就きて宿す。土に坐を設けて臥す。障戸、鎖せず、寒風、肌を侵す。終夜、睫を交ふるあたはず。

(1) 土を固めて作った堤。

(2) 一丈単位で長さを量ること。

(3) まんじりともできなかった。

(有馬)

十一月六日

六日。早發す。西門街を過ぎ、成湯陵に詣る。陵域は、東西の広さ四五十間、南北の長さ六七十間、南北の二面は煉瓦壁の赤塗に係る。東西の二面は往々にして壞損す。南面開きて三門あり。左門より入る。老柏七八株あり。甚だしくは高大ならず。更に中門あり。壁を前庭との間に設く。中門の左に別に一字を築す。人あり。其の中に在り。蓋し陵を守る者ならん。門を過ぎて廟に至り詣づ。廟前に石碑六箇あり。概して皆、康熙・乾隆二帝の建つる所なり。各陵墓を觀るに、二帝の親筆あり。廢典を修せしを記す。人心を鳩集するの密なることを見るべきなり。廟の高さ四間なるべし。広さ六間、長さ七八間なり。正中に成湯の像を安す。南面す。前に大甲幼時の像を安す。傍に小童二人あり。意ふに外丙・仲壬なり。又た臣下二人の像を列す。廟後に陵廟あり。下圍七十歩なるべし。高さ一丈なるべし。脆草茫茫たり。生草あるも、人、其の間より往来して登陵す。低徊すること良や久しくして去る。又た廟前に抵る。壁の左右に四律を題するものあり。右壁に一首ありて云ふことあり。曰く

云々〔之を略す〕又た左壁に書あり。曰く「仲虺墓と陽陵と、屹然として相ひ望む」と。仲虺墓を問ふ。李葆和曰く「陽陵の傍らに在り。既に平地となり、跡を存せず」と。未だ信否審らかならず。時を移して歸寓す。車を駕して、又た陵前より西門に出で、西を指して行く。余、曹州に赴きて、堯陵を觀んと欲す。而るに曹州は曹県の西に在りて、河南に至る。迂路すること一百余里なり。故に西して考城に赴くなり。此の際、概して沙漠多し。車轍の地に入ること四五寸なるべし。樹木茂らず、田の多くは荒蕪す。行くこと二十町、荒原、南北に綿亘す。南の方十四五町の外に、村落、長堤に沿ひて、瓦屋を映ず。朝暾頗る精麗なり。是れ韓庄なり。人家千余戸と云ふ。一小村を過ぐ。長堤の間より出づ。路傍の老椿五六株、葉、既に枯れて落つ。景色荒涼として、画、及ばざるなり。東南、沮洳の延袤すること七八町なるを望む。下堤に又た一長堤に逢ふ。堤を踰え西南して十町許、一村を過ぐ。四周の土壁甚だ長し。西門より入り、西南門より出づ。村内、二百戸なるべし。村中荒涼として、破家多し。屋の大半、地に破敗するもの多し。凸凹として不毛なり。想ふに往昔は人民の住む者甚だ多きも、後世漸く散るならん。是れ王家場なり。

(1) 既に廢れてしまった儀式や制度のこと。

(2) 殷の湯王の孫。

(3) とともに殷の湯王の子。外丙のあとを仲王が継いだ。

(4) 殷の人で、湯王のために、誥を作ったことで有名。

(5) 朝日のこと。

(6) 沼地や沢のこと。

(7) 長く連なり続くこと。

(真銅)

村南の長堤は高さ二丈なるべし。堤を過ぎ又た二三の小村に逢ふ。四顧するに高平にして極目するに際なし。村落の樹木、点綴することを粧ふが如し。四外即ち籠烟すれば、暗くして物を弁ぜず。十一点鐘、竹茅店に至る。土山集より四十五里と称す。此の際、土性黄埴にして凝塊すること甚し。麦畝も土塊累々たり。蓋し沃土に非ず。故に更に行く。三四の小村を過ぐ。午後三点鐘、考城に達す。地、河南に属す。県治あるも人家三四百にして僅かに土壁を周すのみなれば、城と称するに足らず。此より西は又た沙漠多し。四店鐘、又た長町傍を出づ。十町外を南望するに更に長堤の綿亘たるものあり。今朝より屢しば長堤を見る。之を問ふに則ち此れ黄河の故道に係る。而して河の南北に名おの三層の堤ありと云ふ。五店鐘、一小村を過ぐ。丁字寨と曰ふ。更に堤に沿って左転し、而して行くこと里許にして史家寨に達す。一千余戸なるべし。日既に暮る。李葆和をして店をトせしむ。房中、草薦積堆す。家人掃除するも、塵埃飛揚し入ることあたはず。水を澆ぎ坐を其の上に設く。土の凸凹甚しく起臥安からず。戸外は馬矢縦横にして、臭氣鼻を撲つ。幸ひにして来觀する人多からざるなり。午、竹茅店に休す。衆、余の食を喫するを視ひて去らず。困りて湯を澆ぐ。則ち去る。而るに又た来ること初めの如し。鼻間眉上に遍く塵埃を蒙むること密なれば、衆を排して争ひて出づ。其の煩はしきこと言ふべからず。

(1) あちこちにいろいろな要素が調和して全体で一つの美を形成すること。

(2) 馬糞のこと。

(斎藤)

一月七日

七日。東南の風寒く、咸く骨に徹る。午前七点鐘。北門より出づ。西を指して行く。左に長堤を望む。或は遠ざかり或は近づく。道路、沙磧にして、地より高きこと三尺。広さ三四間。左右は、不毛、半ばに居る。九点鐘。黒村に達す。人家千余。史家寨より二十五里と称す。更に行きて一村を過ぐ。地、多く沙漠なり。十一点鐘。紅廟寨に抵る。人家一千五百あるべし。三面に土壁を繞らし、一面は長堤を抱く。堤の上に女牆を構ゆ。凡そ堤に沿ひし村落は、往々にして此の如し。蓋し盜を防ぐなり。午牌、此に休す。來觀する者、最も多し。余、其の煩はしきを厭ひ、書して曰く「字章を知る者あらば、来りて談ずべし。あなたが輩の無学の人は談ずるに足らず。速かに去りて可となす。吾、無学の人を観ること糞土の如きなり」と。中に文意を解する者ありて、為に之を言ひて去る者多し。又た一人の字を知る者あり。人家の若干を問ふも則ち知らずと為す者なり。蓋し疑ふらくは、余以為らく、他、地理情形を査ぶる者ならん、と。是に於て衆、皆黙して言はず。午後一点鐘、長堤の上に出づ。行くこと七八丁、左転して田間に出づ。土質堅硬にして、車行輕快なり。里許。又た沙漠となる。更に進み二三の小村を過ぐ。曠原茫茫として、樹木を見ず。之を問ふに則ち黄河の故道なり。西北を遙望するに一長堤あり。阜丘の如きもの、距離若干を占

めて相ひ望む。近づきて之を見るに、其の相ひ距たること、各
おの半丁許。蓋し往昔、一堆の間に、一小屋ありて兵丁を備ふ。
当に水漲あるべし。土を堤上に盛りて、水をして溢出せざらし
む。堤の東は黄河の古道たり。沙漠は高下一ならず。堤を踰ゆ
れば則ち蘭儀県なり。人家千五六百戸あるべし。城壁、周八里
半。紅廟寨より五十五里と称す。行程、稍や近きものの如し。
意ふに昔日、河道を縮算せし故なり。已に蘭儀に入り、驅車し
て行く。人の尾し来る者、甚だ多し。立錐の地なし。鶏犬、狼
狽す。旅店の人の出でて余を留むる者あり。肯んぜず。西門よ
り出づ。行くこと五六丁。人、相ひ送りて止まず。西門の外は
沙地なり。相ひ属して塩を取る者を見る。水を平地に澆ぐ。製
すること海塩の如し。夜に入りて二村を過ぐ。八点鐘、田寨に
達す。人家八百あるべし。蘭儀より三十里と称す。

(1) 砂や小石などによつて作られていること。

(2) 低い垣、ひめがきのこと。

(3) 正午のこと。

(4) 兵役に服する男子。ここでは水の見張り役。

(5) 増水、大水のこと。

(有馬)

一月八日

八日。大風東北よりす。塵土飛揚し、日光を掩ふ。而れども
天気稍や暖なり。午前六点鐘、田寨を發し西す。一村を過ぐ。
趙頭營に到る。二百余家あり。更に二村を過ぐ。十一點鐘、神
崗集に達す。百家許あり。田寨を去ること四十二里と云ふ。田
土は白塩・黄壤、相ひ間す。■穀茂らず。意ふに耕耘に甚だし

くは力めざるが故ならん。時に風、愈いよ甚だしく、霾として、
咫尺を弁ぜず。唯だ聞く、白楊蕭々として風に鳴る声甚だ大な
るを。午後二點鐘、二村を過ぐ。樹木頗る多し。更に進むに長
堤の南北に横たはり亘るあり。天暗く其の端を見るあたはず。
堤を踰えて四五丁、柳樹路を挟む。其の下は墳墓累々たり。間
はずして其の近郭たるを知る。又た行くこと里許、開封府に達
す。東門より入る。即ち夷門なり。侯嬴の門監たる処にして、
嬴の故趾は城東に在るも、黄河の掩没する所と為ると云ふ。將
に門に入らんとするに、門者、車を扣きて曰く「外にて当に知
府の報を待つべし」と。余曰く「吾、護照を帶す。你が輩の妨
阻するを虞ふるなり。你的不遜なること甚だし。吾、當に破り
て入るべし」と。門者曰く「請ふ、暫らく之を待て。攔阻する
に非ざるなり」と。因りて休む。筆談、物産に及ぶ。曰く「土
物、孰れが多く且つ利あらん」と。曰く「汴紬・汴絲・南陽綬
なり」と。又た城の周囲の人家の多少を問ふ。曰く「壁四十里、
戸十萬なり」と。良や久しくして使婦り、余をして城中に進ま
しむ。因りて車を驅けて城門を過ぐ。外門の厚さ七八間なるべ
し。上に閤あり。内門の厚さ二十間なるべし。宏壮なること濟
南に如かず。市家も亦た甚だしくは華麗ならず。道路の穢なる
こと甚だし。知府に請ひて一美店を挾ばんとして、其の門に到
るに、來集する者數千人、門前に闐ち塞がる。市家、門を開き
人衆を辟するも、相ひ排して車の前に近づく。馬其の首を動か
すあたはず。將に進みて門に入らんとするに、門者不在を告ぐ。
乃ち去りて知県を訪ぬ。門前の人山を成し、復た寸隙もなし。

各おの先を争ひて、人を觀んと欲す。左圧し右擠す。維逐露々たり。余、中門の外に立ち、門者は床に臥して僅かに挨拶を免る。府県の庭中、此の如し。不規なること甚だし。然れども衆心豈に其の勢の如何ともすべからざるか。待ちて時を移す。知県曰く「明日見ゆべきなり」と。即ち人をして店を扱ばしむ。余、其の人を待たすの法に非ざるを難ず。李葆和代書して曰く「使者の罪なり」と。

(1) 巻き上げられた土砂が降ってくることによって、曇った状態になること。

(2) 戦国時代の魏の国の人。魏の信陵君に厚遇され、これに應えるために策略を教え、さらに従軍の替りに、自らの首をはねて餞とした。

(真銅)

十一月九日

九日。疊れども邦に雨なし。粧ひて知府の馬先登を訪ぬ。門に至りて車を駐し、之を待つこと良久し。攘者、不在を告ぐ。乃ち道台の殷某を訪ぬるも亦た見えぬ。余、見えんと欲するに非ず。而れども豫山の信あれば、則ち訪ねざるを得ざるなり。時に李葆和をして入りて見しめ、以て其の帰るを待つ。衆人輻輳し、車の前後、無慮数千人なり。車馬、殆ど其の圧倒する所と爲る。余進み、車前に立ちて衆覽に供し、僅かに免る。將に帰離せんとするに、人の尾來する者甚だ多く、店家の諸器を顛倒し、鶏犬騒動し、避くる所を知らず。馬夫、人に圧迫せられて以て其の指を傷つく。知府の使、至りて曰く「大人帰りにて済南の書信を閲す。願はくは重ねて來れ」と。余諾す。而して飯

し、乃ち後に知府に抵る。門に立つこと良久しくして、乃ち外房に就く。衆人、蜩集煩囂す。人の來りて余を導くありて入る。知府又た出でて迎ふ。共に別房に入る。知府の衣冠頗る美し。齡五十余なるべし。豫山に比べ稍や謙恭を欠く。余亦た藐然とす。婦人或は戸障を破りて窺ひ見る者あり。戸外にも亦た余を環視する者多し。余、傍に人なきが如く、意氣揚々とす。

馬問ひて曰く「明の張士誠、日本の辺りに在りて乱を作す。俞大猷・戚繼光に命じて之を平定せしむ。子、豈に之を知らんや」と。余曰く「日本に害を加へんと欲するは、唯だ元の世祖のみにして、余は未だ聞かざるなり」と。馬又た曰く「禹貢に「島夷卉服」の説あり。日本は古より衣服鮮華と称す。今尚ほ然るか」と。余曰く「敵国の風俗は男女清潔を風と成し、中国と同じきなり」と。既に茶及び菓饌を出し饗す。余、時を移して去る。門に至り余を觀んとする者の、方数十間の地上に充滿するあり。寸隙も見えざるなり。

(1) 宋代以後置かれた官名。権知府事の略。

(2) 地方長官

(3) 寄り集まること。

(4) 多くの物事が一時的に集まること。

(5) 疎遠なさま。

(6) 元、泰州の人。元末に兵を起し、誠王又た呉王と称し、国を大周と号した。

(7) 明、晉江の人。倭寇を破り、惠湖の群盜を平げた。

(8) 明、定遠の人。登州衛指揮檢事を世襲する。副建省總督

になり、賊を平げ、戚家軍と称した。

(9) 『書経』の篇名。禹が定めた九州の土地・産物・貢ぎ物について書いている。

(10) 『書経』禹貢の一文。

(11) こなもち。むしもち。

(斎藤)

二月一〇日

十日。晴霽。人の来りて観る者、甚だ衆し。一人を召して、汴縞綢及び役夫・馬匹の価を問ふ。曰く「汴縞・汴紬は、好きものは毎尺大錢二百八九十文、次なるものは二百四五十文。雇人は毎日、二百余文。若し馬を買へば、毎匹三十兩・五十兩と等しからず」と。午後、蒼頡墓・造字臺・梁王城・汴古城等を觀んと欲す。一千元を出して別に馬を雇ひて行く。人の故蹟を知る者なし。西北に赴かんと欲するも、却つて東門より出づ。余、屢しば之を辯ずるも通ぜず。馬夫に従ひて行く。東南のかた里許。玉皇廟の傍に抵る。馬夫、屢しば之を指して云々。余怒る。衆人の環視する者を顧みて信陵君の墓を問ふも亦た知る者なし。汴水を問ふ。則ち前路の橋と云ふ。馬を還して四五丁。橋に至る。水の広さ六尺、深さ一尺。亭蓄して流れざるものの如し。橋の長さ僅かに二三間。河と称するに足らざるなり。想ふに昔は此の如からざるも、黄河の勢に依りて変ずるが故に然るに致るか。終に当に歸りて浪没するのみならん。又た或ひと曰く「汴河は実は西方に在り」と。信じ難きなり。又た東門より歸る。第一の外門は厚さ五六間、次は八九間、次は厚さ二十間なるべし。皆、上に屋を設く。今日、大衆の余の前後に空集

する者、後日に異ならず。寓に歸るに及び、馬夫の途を誤るを責めて曰く「西北に抵りて故蹟を見るに非ず。一千元を給するを得ず」と。馬夫曰く「閑雑の人の圧迫する所と為りて殆ど死せんとす。十千文を給すと雖も行くあたはざるなり」と。李葆和、之と争ひて異論あり。

(1) 黄帝の臣下で、鳥獸の足跡を見て文字を作ったとされる。

(2) 道教の天帝を言う。玉皇大帝、元始天尊とも。

(3) 戦国時代、魏の昭王の子。食客三千人と言われ、諸侯に名をとどろかせた。

(4) とどまりあつまること。

(5) ほろび、なくなること。

(6) むらがり集まること。

(7) むだなもの、無用のもののこと。

(有馬)

ありま・たくや(総合科学部助教授)

しんどう・まさひろ(総合科学部助教授)

◆ ◆
會員募集 徳島大学国語国文学会は、国語国文学・中国文学・

国語教育などの研究ならびに会員相互の親睦をはかることを目的に、昭和六十二年十月に発足しました。この趣旨に賛同なさる方なら、どなたでも御入会になれます。本学会では、一年に研究会一回、機関誌発行一回、『会報』発行二回を計画しています。会費は三千円(年間)。このほか入会金として二千元をいただきます。多くの方々の御入会をお待ちしています。